



里見八犬傳

第二輯

卷三

709
8



門遠 13
 號 709
 卷 9



明治二十六年
 十月九日
 購

南總里見八犬傳第二輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第十五回 金蓮寺の番作警を撃つ
 拈華庵より來客と苗む

前卷既小鏡流る伏姫富山へ入るや比の十六歳のと死する長祿元年の秋より也又金鏡入道、大坊の嘉吉元年の秋父孝吉が自殺せりと死既五歳よりけし長祿二年富山より伏姫自殺の憂に係る猛小出家入道より躬を雲水に任し、手教行脚の首途せり。このと死北二歳より也伏姫の年より小十七よりて身より也、大坊の姫よりその年才五の兄よりけし、長祿二年より也、寛正より也又六年より也、文正と改元せし、

又應仁と改めし。此より僅小二年あり。文明と改えありけり。應仁の内乱治り。戎馬の蹄趾を掃ひ名をさしける。華の洛へ舊の春邊小立入り。稍長閑なる。此の比の事。文明五年春三月。宗全病。亦病。卒。五月。至。勝元。征。この年。勝元の長久。十八年。前卷。けり。あふ年。序を。伏姫の事。大行脚の啓行。前卷。長祿二年より。今文明の季。年。無慮二十餘年。及べり。この間。犬塚信乃が未生。已前の。其の。亦復。嘉吉。起。文明の比。至。後土御門。天。皇。の。御。宇。常。徳。院。足。利。義。尚。公。將。軍。と。す。寛。正。文。明。の。武。藏。國。豊。嶋。郡。菅。菰。大。塚。の。郷。界。大。塚。番。作。一。成。と。し。武。士の浪人ありけり。その父。近作三成。ハ。兼。倉。の。管。領。足。利。持。氏。の。近。習。なり。永。享。十。一。年。持。氏。滅。亡。の。と。近。作。ハ。精。悍。忠。義。の。近。臣。と。相。謀。り。て。

持氏の。子。春。玉。安。玉。西。公。達。を。獲。去。り。下。野。野。末。結。城。氏。朝。又。精。待。せ。り。主。後。の。城。又。猶。籠。り。寄。り。の。大。軍。防。戦。年。を。重。ぬ。と。上。の。士。率。の。一。致。一。境。一。氣。色。ハ。る。り。嘉。吉。元。年。四月十六日。歳。木。五。郎。が。反。忠。あり。必。ひ。り。攻。破。す。大。將。氏。朝。父。子。ハ。弓。方。の。猪。将。恩。顧。の。上。率。面。由。ぬ。が。衝。て。出。奮。戦。時。と。り。と。遠。く。討。死。し。西。公。達。ハ。生。拘。ら。れ。この。大。塚。通。也。今。茲。十六。歳。を。一。子。番。作。一。成。を。招。け。り。息。つ。れ。あ。べ。い。け。り。か。う。の。波。の。老。が。小。生。死。の。海。ハ。ひ。う。け。百。年。千。歳。の。後。で。と。渡。冊。と。西。公。達。運。微。く。し。防。戦。遠。く。合。期。せ。諸。將。殺。せ。城。墾。陷。と。君。辱。め。と。あ。ふ。入。臣。の。死。と。べ。れ。時。あり。と。と。と。海。俸。の。身。り。あ。ふ。あ。い。狗。死。と。き。あ。ふ。と。且。兼。倉。と。落。し。

と見汝が母と娘亀縁ハたつる由縁を求む。武藏國豊嶋なる大塚よ
借とれたつ彼れハ汝もあはるどく。か先祖の生園より則苗字の莊園
あはとも今みてハ名のよめてまじく他人の有とるまは難く渠ホを養ふ
づれあはとも亦不便のるん汝ハ命るどく。大塚の郷は外き父が最期の
中も汝も告く母小仕、孝を盡せ然し、これ由狗死ハせと孺君とら
とめんといふとと柳營の御親族有撃小金枝玉葉るまは左右るん
命も及ぶべし。こも一方を殺脱し、竊又あん跟成莫かひわのせ利
め、ハ西公達を偷とると寺々んさつと大厦の傾くとき、木をりて柱がじ
縛成らざら討死し、黄泉のえ俱まべれん。是ハこと主君重代のおん
佩刀村雨と名つけし。おん佩刀のえ小就く。さあくの奇特多し。中
殺氣成會く扱とるせん刀の中心は露雷留は呪てそ人を破るし。六雷留は

おの流とがどく。鮮血を洗うと刃を洗ひ、譬ハかの村雨のよふとそ流は異
あはとく。村雨と名づけらる。実ハ源家の重宝るまは先君持成。いとたや
あつと春玉君小嬢とせむし。護身刀とせむし。孺君とらむとそ人とも。
今おん佩刀ハこがもふあり。こはり、本意を為遂むと。主後命と其
れハ。隕た。おん佩刀ハ敵とせれん。さでハいよ、遺恨るまは。よるま
汝に遺はる。孺君必死を腹とむし。あはびせよ。由遺迹より。一番ふを
あつとく。宝刀を返し。やあはせよ。又替むし。あはびと。おん君父の像見え
こは。主君とそ。まつら。おん菩提を吊とせ。勢と疎畧まは。うと。こ
あは。あつと。やと。鏡示し。錦の囊は納る。終腰は帯る。村雨の宝刀と。こ
子ハ。與ける。番作二ハ。少年るまは。その心は。遅く。人あは。みま
や。あつと。横と。あは。一言半句も。情の。を。膝。く。跪き。件。の。宝。刀。と

受收めぬら安う是師教訓有るはあぐふ泰くまづ服齋仕つぬ
 小福らりともこの父の鎌倉殿持成の家臣なり某寔は不肖るまごも君
 父の必死を外よんて脱るは歎んや。さうも名を惜み穢を顧み父子の
 共は死地小就るべ名聞は似く君父は益る。存命く母と嬪を養へと
 宣ひまゝ。おん慈み某が身ひらつふゆらご親子三人がうへは係る。かんでふ
 推辞をうんとくし再會揣がえん。おん別はよゆ某おん先つらまづんせぬ
 て、親子のろ共は虎口を脱きまゝ。おん澄の威毛のいと花をめて目らるる
 雑兵の草具足袖解捨くまゝせん。是もや穿たえ多ひ穢と慰めくかひ
 かひく。落度度をいそがせん父のわざ乾ぬ涙の目尻拭ひもあをど莞尔と
 笑ふ番作微妙いひつるまは只管血氣ふをちりろ共小死んとて争ひや
 せん辞ひやせんと思ふは似るまは親恥しを孝心ると固より先期のろ

つらまづとも雑兵亦よこち雑まぐ一圓虎口を脱きまゝ。あゝのま親と
 子がろ共は奔りまゝの謀るるは似たり。汝ハ先はたも落よこまは又後より
 途引ちがと、去去をんいそげや急げと焦燥声由矢叫の音小紛らるる。攻
 り敵軍必死の城兵撃つるもあつと勢もあり。名をるまは偽武者は足信
 ち風は落まの閃く如く堀を踰溝を涉り。路なき途は求めつ。四零
 八落小逃亡。緯の紛らる大塚親子も辛く城中を脱き去親の子を
 見えまごも竟はその勢と見えむ子ハ又親を索まごもあふり絶く
 らつとけり。抑この一條の物語ハ肇輯第一の巻端は脱出する。結城合戦
 落城のと見里見季基送刻く。嫡男義実を延せりと是同日のまはて
 彼ハ義小使る智勇の大將此ハ誠忠譜弟の近臣官職素よりその差あり。
 言私よ及ぶといとも恩義のあふ身を殺し。その子のとあ小訓をのこせし。

ありし節を合する如く人の親なる慈もおのづから誠なり。却説大塚
 番作ハ父の必死と外小入り存命べくも思ふ子どそを争入由火急の折
 り志立んとく父の今果小助死せよと死所移小時を殺す。又
 親由子も虜とるる後悔其死又立かじ一旦その意又任ると又
 せんまどのるるどやいと死めを思念しく馳て城中を脱き出
 袖號を擲擲捨く髪を素く面を隠し敵兵小も雜り西公達乃
 ちん所在と老びく小窺ひけしひあつと後と君を死ん公ハ父匠
 作ハと敵陣小紛入り入り。縛の為体を窺ふ小春王安王のハ胞元ハ
 管領清方が後軍長尾因幡ゆが小生拘ら軍散と後小鎌倉へ
 とせのろくハ匝他ハ猶安を喪容を奪く先途死んんとするは五月
 十日未もろ小及びく清方則長尾因幡ゆを警固使と信濃ゆ政康を

副使と西公達死あるるる軍興又乗とてあつと京都へ上せけり。
 大塚近地このと死小又政康が後率ふる上清して陰るる西君の
 小供一守りともわくもして道中もく竊とりあつと死と豫く謀りる
 ろ宗徒の兵士二百餘騎四面八方をうちかこも夜ハ通宵本陣ハ無火を
 燒明し幾隊の火長送代又夜行し露むるも由おせがれハ近地を
 小似も予く小肺肝を推くめのも絶てその隙るるけり。さゆふ
 西公達ハ五宿六宿と旅宿をかこも。あつと月の十六日小青野が原と過り
 小浩処又京都將軍よりあん使あり。西公達を今とつ小都へ入とて
 ちん路次めくを小殊もあつとせ。あん首級との存せり。と信仰下され
 長尾小こも美表り。とつとく兵濃路る樽井の道場金蓮寺小あん
 典を扛入とせ。その夜住持を戒師とく。形のとくとり移ハ矢来の四面小

怒を報ひく
番作君父の
首級せかき

大塚番作



中おの頭二

牡崎崎小郎



べし。兩公連の山頭、顛ハ破と地ヲ落し、匝吐嗟と、用練世、警固の武士を
躑躅と。矢来の内ニ跳入リ、兩公連のちん傳、大塚、匝吐、あふあり、怒乃
刃受とや、と怒の大音、名告けけ、二尺九寸の大業物、抜、尖く、錦織頭
ニ、肩尖より、乳の下、おど、む、つと、むんと、砍、付、せ、バ、牡蛎崎、小二郎、大、足、ふ
驚、き、原、來、癡、者、脱、さ、し、と、合、子、さ、る、血、刀、閃、の、處、く、ゆ、と、人、向、匝、吐、が、右、の
腕、水、も、溜、り、と、砍、落、し、弱、ふ、と、ろ、ろ、と、置、け、け、細、頭、葦、石、と、ろ、ろ、と、落、せ、し、
陣、笠、被、さ、る、一、個、の、雜、兵、群、左、さ、ろ、ろ、と、兵、士、を、推、し、け、換、し、け、飛、ぶ、如、く、小
矢、來、の、内、へ、進、入、し、ろ、ろ、と、兩、公、連、の、ち、ん、首、級、と、左、小、鬚、鬚、よ、せ、匝、吐、が
首、を、と、り、あ、げ、改、髻、を、口、小、楚、と、筒、え、く、左、を、ろ、ろ、と、腰、刀、ぬ、く、ひ、を
こ、せ、し、と、牡、蛎、崎、を、斬、竹、割、と、砍、伏、し、り、あ、ひ、け、る、え、ろ、ろ、れ、バ、二、百、餘、人
の、兵、士、ホ、あ、ま、下、し、と、散、動、く、の、と、進、入、し、呆、れ、と、く、せ、ん、と、と、と、と、遠、く、を

前、る、人、小、壘、ま、ろ、く、左、右、ろ、ろ、と、進、入、し、り、その、隙、小、件、の、を、の、こ、陣、笠、子
を、小、横、遣、乗、持、氏、朝、臣、恩、顧、の、近、臣、大、塚、匝、吐、三、成、ろ、一、子、番、作、一、成
十六、歳、親、の、教、訓、固、辞、ろ、ろ、と、戦、場、矢、腹、を、ま、り、父、の、あ、ろ、ろ、と、せ、し、ろ、れ、も
亦、君、父、の、先、途、死、に、果、ん、ろ、ろ、と、の、怨、を、ま、り、ま、ぬ、ろ、ろ、と、小、親、の、仇、人、ろ、ろ、と、ち
と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、怒、ろ、ろ、と、の、あ、ろ、ろ、と、搦、よ、ろ、ろ、と、喚、ろ、ろ、と、因、幡、ゆ、倍、と、ろ、ろ、と、原
來、結、城、の、殘、黨、が、早、晚、紛、れ、入、ろ、ろ、と、遮、莫、九、十、も、え、ろ、ろ、と、ぬ、童、が、分、際、で
何、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、彼、生、拘、と、下、知、ろ、ろ、と、不、義、ろ、ろ、と、縣、の、士、率、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、小
見、と、矢、來、の、内、へ、入、ろ、ろ、と、ま、り、如、真、額、梨、割、軍、切、秘、術、を、竭、き、し、
煉、の、大、刀、風、壁、ハ、草、の、偃、も、如、く、又、秋、葉、の、散、ろ、ろ、と、その、刀、尖、又、向、入、り、の
深、瘡、を、肩、ぬ、ろ、ろ、と、け、り、故、あ、ろ、ろ、と、番、作、が、刀、ハ、名、小、お、村、兩、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、
刃、の、奇、持、行、も、ろ、ろ、と、ち、振、ろ、ろ、と、び、小、刀、尖、より、涌、出、る、水、披、霧、の、ろ、ろ、と、四、角、ハ

方ふふまのこくを焼つけしと蕉火舟火とよかぬふち滅さる時一由鼻
 月の天るま六昏の雨雲いやかさるりく。十六日の月見え如法暗夜と
 ろるこく長尾が士率へ同士撃して瘡を被りあまもくヨふる番代を
 この光景又天の祐といふく氣分ゆるく。撃麻羅。殺用を矢来の外衝と
 出くヨ勢の中へ割く入り。透矢槍の墓原るる藪を潜り溝をぬこえ
 往方もまももごころのふけし現由大敵ゆく事小熟る長尾のいた
 名劔の奇特ふより舟火とく小滅とく一癡者をの擲む刺春王安王の
 ちん首級を奪ひとくと面目を失ふのうらさてあえ死よあふごごが
 京都へ使者とあわせせと。且室所將軍へ縛の越矢折るその夜より
 八方へ部一く日毎小番代が往方を索求ととも。そとととる死よと
 ころく徒小日を送るや小京都へあわせせと使者とて身て所教

書えとくとととを瓜因幡ゆ恭く受とりてみるり共拜見をそ
 略は春王安王が首級を奪ひとくとととの大さるる越度るよとも
 既小殊果ととと益一のり小益あるはく。國家のる小害あふむととと
 長尾因幡ゆか今度の軍功は換思食その罪を宥らゆ鎌倉君へ罷
 下く清方小告とととせ残黨穿鑿ととと見者也仍執達如件嘉吉元
 年五月十八日斯波義淳等奉ると続あへむ長尾主従微笑ととと
 ちんめて安堵のゆひ瓜る一軀と西公陣のあん軀をとると斂ゆ勢れとと
 士率の亡骸ととと金蓮寺小葬果て次の日樽井と覆足一鎌倉と投て
 選りける長尾ホからこの下は結る一案下某生再脱大塚番代へ必死
 の覚期も忠孝の誠を護下せぬふたの神明佛陀の冥助よとととけんかく
 一條の血路へ用きととと金蓮寺小腹ととと去東を望ととと終夜名をふゆとととらぬ

越えたる河川より荒井人と左邊右邊をこえ久まらぬ新築とあはれりて石を
 居ざらば一座の塚ありこのほりの塚をうらうらと掘りて小便すとのけりも
 この新築と推進すべしとていふも穴を掘り二頭を深く瘞めく昔乃如
 く小塚を採ひ跪て合掌し念に果て身を起し鍾子と養子のちくえ
 久返りて裏面より人のあやうやや維とちかちか声もせむのでかた鹿園の方へ
 立ち上りほろけと戸を敲たてし。喃の菴主はあやうとて山路は日を
 くらそく。餓つてはさる行人あり。素より慈善をあらわしとて道場よりそ
 こをれ今宵はあやうとせむ後とらひりけく戸と推開けし菴主とあはれ
 志れぬををく。いひぢまは一個の女子その年ハ可二八鄙みはあれど
 鴈陣と露衣合ふ野の花の白とちか風情あり。独孤燈より對人入
 ちちつらびらあめちるる。今番作が門吏は戸を推開て進へる。

その為侘の異つて駭れあそびてく應答はえんむ。あつてはあつて
 目成まゝ女子のいひ堪もやあやうとて衝と立ち納戸のえ又避んとす瓜
 番作の遠く喚とめ女中さのえり駭れむ。そこの山容夜盜
 あつてきのみ如此このとろろい親の仇人を撃果し更と他人の援
 力を投擲すまつる力のえとてなきのみの終ありて。飢勞をわくわくと
 めるのうと一腕の飯と恵しく宿を許しあふ。是再生の洪恩あり。吾
 つむむるとも野心あり。疑ひに反釋せむ。といひ諭し腰刀を右へ小取て
 後方へ推遣り養子の上へ進登し六件の女子へおそく。行燈の灯口
 そう向く番作が形容をつくとつとて歎息し。尚年少れ方ごの壁言を
 撃つる途の難義と救ひあはれ。只一碗の糧と惜て強顔款待へうハ
 あつてはあつて宿所ゆき。宿所ゆき。道場より固より田舎の

事ありて菴主の外に成る人あり。響よみん亡親の墓をなるともくは
 ありて菴主の法師の鳴とありてよくとすをまつとから事小く。貧道入大
 井の郷までゆく。黄昏みんくと来る人。おちがねで留守してよとていふ
 るふ固辞がうて。趾あつるまう悔くくと今うくと俟わぬ日とてや
 暮るまうひふ捨てかへるよ還とてせんとせむるくか。且飯ハ
 あるまううて。かたはな任せがじ。といふ瓜番他ひあゝいづとそふ
 理りなきとて菴主の還る瓜むんとて。輓鮎の穴筋を救つれむとれ
 たる枯魚の市小售とん人を救ふ出家の本願。菴主小敷。まのんど
 こと行ふさあひぐ外を待べたり。久と来るくうち腹とておち
 身を叱らば某あり。くひ釋べ。枉く餓渴を救ひ多人とて求る小推辞
 ころ山折敷の麻布帛うち掛る。菴主の碗をそがまふ番他がたと

つふまきとて山檜小藤並せ。飯椀を引下せ。堆高く盛く。いそぎ乾菜
 まがとの鹿皮も時よとて。ハ美味珍膳皿又塩盈玉味噌ハ口濡を
 ほうちを免椀の糧食竭るまで愉く食。畢りて飲りたり。瓜速指あり
 遣まひをうま子ハとり納め。中の客人餓渴ハ救ひおあせり。菴の留守小
 こつたしちがり共。今宵を曉さ人の疑ひ瓜のふせんとく。おちぬ人
 と強面の瓜耳ゆるひぞ袖をたあけ。臂さし伸とて足更く。の如く数个
 所の金齋あり。のが。即ち瓜寝小寝とて。何する瓜を待べ。その疑
 ひ入るまをよき人枉く一宿曉さる身。餓る腹成結ひ。今一トるま疲勞を
 せ。一歩もゆえ。夏の夜も短く。初夜とて。さる宿も。菴主ハ
 還らまひ。枉く一宿曉さる身と地更る。いのちとて。是さ。又。推辞ハ移り
 歎息。さても便るを。あなる。さるとて。あは。移り。あは。か。も。

山院小宿
父
老番作
子東と娘ふ

番主取牛



白杜

たつり
淡

可洞羅窗多

苦原舎新



天塚番作

女子ハこゝろ狐禁あへて髪うすま茶とよと泣害心既小頭後なる為体小番地ハ
 聊も疑つて紙門を下と蹴りたぐる。庵漏のく入跳出山賊とて狐殺さん状
 ことばづ汝を殺まじと罵あへて花かまふ悪僧大死ようち驚死會ふこと
 刃を閃くぞ砍入とま赤巻の下を踏足脱々足狐死しく腰眼のおこつて狐
 磯と蹴る蹴らましく前へむましくと五六歩まき出るとかろく小踏駐アさり
 かろく突かくる狐右へ流し左へ下り数回うけ悩む疲勞も忍びつけ入りと
 つひあつて
 竟刃をうち落せば悪僧のゆくまろ慌しく逃人とまき不番地ハ某刀の
 をかへとと揚ぐ賊僧天罰もひと罵る声とりろ共よあむせけとる
 刃の雷光脊脩狐うく劈たり灸所の痛疾よ霎時ゆゆ憾を悪僧ハ苦と
 叫びく仆る胸臍を免の刀尖刺つたぬ死しく引抜某刀血を揮ふけて刃と
 拭ハ膝巻と逃ゆるむむ伏沈とて高女子と對ひく眼狐瞳か声あり立

汝ハ甲夜よ飯を恵く一碗の恩ある不似たり又賊僧がかつりあまこれと殺
 さんとて狐禁めとハ惻隱の心あるとともこの賊僧が妻とありて是まで
 いくその人を殺せし是も亦まづとされば脱とぬ天の縁速よ首伏しく
 刃を受よつふぞやと問きて僅小頭狐拳その疑ひハ情由まらぬおん者が
 心のまじひよとてとらま固まると怒つめのみらとどといらせもあへて冷笑ハ浅
 くらとを左右よよせく時を殺しく小賊ホグかつる狐まらしく夫のくあふ
 然狐復人と名ふ汝が宵月中ことかかるとの伎倆は無人や告げられりて
 のらせんと打見を某刀の光と共に花退死中よ俟あふのふとあるとといへ聴ぬ
 怒の刀火何れやと力と黄縁を刃頭小指ゆる竹の雪小折るん風情よて右
 へ狐伸し左へ狐衝片膝まき身を及り後さぬ小逃遠る狐番地をうらほ
 逃さると誓べしけし拂ふ沈と立人とまき頂の上よ閃く氷の刃脱とる狐

懐へさうへうの間も多く、砍人と進む目前へとまき一通つたはけくこきて疑ひ
 散し多し、とてなやと西のひみ引延し、命乞の筆お示せし、その為れ素
 姓番作得と透し、心も多し、かをとと直し、あろゆるる死書状の名印
 林妻賊婦が艶書欵と名ふふ似む、勇士の遺書かうこそあり、その
 情由語とと身をむり、刃を席薦お突え、膝折敷く、目守くをり。
 當下女子へ一通を巻かき、眼を拭ひ、かぎ似ける、道場乃留守
 せ、同よ今宵の尼難搦と加て、あろかろく、あつとまのめをむり、あつとま
 匿む、あつとまのやな抑とく、あつとまの坪坂の人氏井丹三直秀が女兒を、あつとま
 鳴つ、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 のおん滅亡、西公違へ、結城の城へ眉籠らせ、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 起り、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 武運、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 ころ共、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 家の老僕、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 仰つ、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 便きて、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 途の疲勞、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 奴婢、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 ら、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 磬蟬、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 の事、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 場、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、

武運、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 ころ共、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 家の老僕、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 仰つ、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 便きて、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 途の疲勞、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 奴婢、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 ら、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 磬蟬、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 の事、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、
 場、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、あつとまのあつとま、

布施齋^{ふせう}。ここの由けりも亡親の墓^{かぶら}。毎^{ごと}に菴主^{あんち}ハ慰^{なぐさ}め
 志^{こころ}が程^{ほど}とて菴^{あみだ}の留守^{しゆすゐ}任用^{にんよう}しめて出^でておたつ。こゝろの甲夜^{がや}の同^{どう}
 既^{すで}におん身^み又^{また}告^つげり。この道場^{どうじやう}を拈華^{ねんげ}とし。菴主^{あんち}の法名^{はうめい}ハ蚊牛^{ぶんぎゆう}とせり。
 彼^か此人^{こじん}の帰依^{きゐ}僧^{そう}も。か家が亦^{また}擅越^{せんえつ}する。聊^聊疑^ぎふ。よももう清^{きよ}
 隨^まハ推辞^{すゐじ}後^{のち}菴^{あみだ}を守^{まも}り。日^ひをらじ。菴主^{あんち}か還^{かへ}り。後^{のち}ハ稍^{さう}あつりての
 不^ふろとん。あつり。残^{のこ}り。死^しかゝる。この法師^{ほうし}何^{なに}の程^{ほど}ハ懸想^{けんじやう}し。こゝろを一^{ひと}宿
 苗^{なへ}人^{びと}とめ。不^ふ流欺^{りゅうき}と。苗^{なへ}守^{まも}り。小夜^{せや}深^{ふか}居^ゐ。比^ひか。り。あつり。こゝろを捉^{とら}へて。艶^{えん}
 語^ご法師^{ほうし}ハ又^{また}あつり。死^しは。嫌^{きら}け。さ。う。死^し。つ。不^ふ月^{げつ}候^{こう}。阻^{とど}めて。ほ。と。と。へ。よ。せ。著^{ちやく}
 後^{のち}ハ果^は威^ゐの菜^{さい}刀^{とう}を。ち。肉^{にく}し。挑^ひび。程^{ほど}。よ。その声^{こゑ}。又^{また}。高^{たか}う。う。り。て。い。ご。と。死^し
 ち。乃^{すなは}ち疑^ぎれ。し。ひ。ろ。く。殺^{ころ}。さ。と。り。只^{ただ}見^み過^か世^ぜの業^{ごう}因^{いん}。欽^{きん}。仏^{ぶつ}子^こ。と。て。婦^{むすめ}と
 貪^{くわん}王^{おう}。魂^{たま}を。ろ。く。と。つ。瓜^{うり}苗^{なへ}め。強^{つよ}く。姦^{かん}。え。と。せ。眞^{まこと}罰^{ばつ}ハ。主^{しゆ}地^ち。あ。と。その身^みハ

及^{およ}び。いと悲^{かな}しむ。死^しは。あ。つ。り。ん。こ。ゝ。ろ。が。あ。ん。乃^{すなは}ち宿^{しゆく}せ。り。の菴主^{あんち}ハ。ま。言^{こと}る。小
 皇^{こみかど}。と。つ。縛^{しやく}。と。あ。つ。り。の。瓜^{うり}。渠^{みち}。の。り。と。う。ろ。ろ。が。外^{とち}。ハ。又^{また}。人^{ひと}。あ。つ。り。と。ま。は
 ち。乃^{すなは}ち。あ。ん。乃^{すなは}ち。あ。ん。乃^{すなは}ち。思^{おも}惟^ひく。その疑^ぎひ。瓜^{うり}。散^ち。り。あ。つ。り。と。ま。は。日^ひ。と。ま。は。結^{むす}城^{じやう}
 の残^{のこ}。堂^{だう}。他^たの凋落^{てうらく}を。自^{みづか}。の利^り。し。て。捕^{とら}。と。都^{みやこ}。へ。牽^ひ。ん。と。る。瓜^{うり}。脱^{だつ}。り。り。路^{みち}。ハ。比^ひ。
 人^{ひと}を。殺^{ころ}。し。物^{もの}。瓜^{うり}。思^{おも}。る。賊^{ぞく}。婦^{むすめ}。梵^{ぼん}。妻^{さい}。と。つ。り。乃^{すなは}ち。被^ひ。せ。し。儒^{にう}衣^い。と。つ。り。説^{せつ}。と。つ。り。
 死^し。つ。り。と。ま。は。亡^な。親^{おや}。の。各^{おの}。瓜^{うり}。汚^{けが}。ら。と。つ。り。と。ま。は。あ。つ。り。惜^{おし}。く。と。つ。り。瓜^{うり}。惜^{おし}。
 死^し。つ。り。と。ま。は。目^めを。押^{おし}。扱^あ。り。雄^{おし}。と。つ。り。死^し。つ。り。少^{せう}。女^{によ}。の。物^{もの}。を。り。不^ふ。番^{ばん}。他^た。名^な。と。つ。り。小^{せう}。孫^{そん}。を
 拍^{はく}。原^{げん}。來^{らい}。あ。ん。乃^{すなは}ち。井^い。丹^{たん}。三^{さん}。直^{ちく}。秀^{しゆ}。め。の。息^{いき}。女^{によ}。を。り。欽^{きん}。今^{けい}。示^し。と。つ。り。一^{ひと}。通^{つう}。と。つ。り。直^{ちく}。秀^{しゆ}
 と。つ。り。統^{とう}。一^{ひと}。と。つ。り。同^{どう}。名^な。異^い。人^{にん}。を。り。あ。つ。り。又^{また}。不^ふ。嫁^け。由^ゆ。を。り。傳^{でん}。と。つ。り。あ。つ。り。と。つ。り。名^な。を
 告^つ。と。つ。り。に。不^ふ。藤^{とう}。倉^{そう}。譜^ふ。第^{だい}。の。近^{きん}。臣^{しん}。大^{だい}。塚^{づか}。匠^{じやう}。作^{さく}。三^{さん}。成^{じやう}。が。子^こ。不^ふ。番^{ばん}。他^た。一^{ひと}。成^{じやう}。と。つ。り。名^な。を
 傳^{でん}。と。つ。り。西^{さい}。公^{こう}。達^{たつ}。と。つ。り。傳^{でん}。と。つ。り。管^{くわん}。城^{じやう}。の。不^ふ。老^{らう}。を。り。あ。ん。乃^{すなは}ち。父^{ちち}。と。つ。り。日^ひ。が。父^{ちち}。と。つ。り。共^{とも}。小^{せう}。後^ご。門^{もん}。を

妹伏といふもなごうる。けふもさうく存亡をわんがと共のせまひ死外
 情願のるをそとよ。独小くせむひ後といひあ人を類かち掩へ番地は
 感嘆し。さうもさう小男姑塚を並へく西公建の透骨を守々のさうを約
 束かえ妹と伏し濃會せむひぬ。とを將親のさる九魂の償えむひ疑ひ
 る。かまふあ人を携へ深く浮世に潜へ。然るが。おの親の喪かされ
 夫妻といふんもむむ。十二月の服果く又更めく夫婦とる。えとひふ
 東へうち点取。さうも如右ぞむひ。あん男既は蚊牛法師を殺し
 多ふ人もさうん後の殃危さうもさう。あん男既は蚊牛法師を殺し
 伴ひさう。信濃さう。筑摩さう。母さうの由縁あり。特は亦彼如の温泉を刀
 瘡と効あささう。む。浄見原の天皇は湯は行幸あんとく。輕部朝
 臣足瀬等。又行宮を造じ。さうも今と序湯とぞ唱へ。さう。鑄良かえた。

筑摩の里へと勸え。番作とさう。隨ひく。天あけぬ。ね。あ。とい。さ。更。さ。さ。
 東を伴ひく。拈華庵をま。さ。と。む。く。正。僅。小。五。六。町。遠。く。後。方。を。さ。え。之。目。六。
 道場のさう。火のえ。出。く。く。先。さ。え。あ。さ。う。の。り。の。さ。東。へ。こ。さ。う。
 あ。さ。地。や。や。と。さ。心。慌。く。火。灰。滅。さ。さ。と。さ。さ。過。失。さ。く。け。り。と。さ。
 咳く。瓜。番。地。の。さ。あ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
 山院。さ。さ。遠。く。遠。く。佳。境。さ。さ。と。も。乱。さ。さ。清。僧。稀。く。彼。蚊。牛。尚。姑。を。
 貪り。漫。ふ。不。良。の。さ。さ。起。せ。り。渠。死。く。後。住。さ。さ。山。賊。の。寨。と。さ。
 と。さ。ひ。け。さ。さ。さ。さ。理。火。を。捨。起。し。障。子。簾。を。下。の。せ。う。け。あ。さ。さ。
 り。て。被。庵。室。の。さ。灰。燼。と。さ。さ。と。つ。る。蚊。牛。復。よ。その。罪。あり。但。渠。の。さ。
 欲。死。の。遂。む。さ。さ。さ。さ。死。せ。り。の。憐。む。や。と。あ。さ。さ。さ。さ。さ。
 せ。さ。さ。法。師。を。火。葬。し。く。その。脚。か。け。り。さ。さ。一。片。の。老。婆。心。

彼知の君父の墳堂ありつと瓜燎とよめふあつと賊の害とよめふ
 多ぶとこ己と知れぬとよめふ。こは猶後の大さるる志氣なりとよめ
 夫れ彼知の伽藍を建まるとよめふ。難きとよめふと論せむ。未だあつて
 睡りて。且感且嘆。件の猛火火燭ありて。後小眼を又先かまひて
 塗をいそげり。姑分而動。衣着るる大塚の舞は母の共。年暮潜居
 ことけり。大塚匝作が女兒。龜條の前妻の子ありけり。番地は異母乃
 婿ありあつと心ざり。父の弟あり。似たり。めり。親同胞の筆。城を想
 像る。気色もろく。況く。継母の千幸。萬苦。露むる。念とせ。く。生
 まる。つれ。比あり。結髪化粧。春の日を長くとせ。と。情。命とよめ。び
 あ。日。秋の夕を短くとせ。嗚呼の聲。婦あり。と。い。ども。生ぬ。う。と。く。母
 親。ハ。仇。う。く。こ。瓜。懲。ら。は。傷。い。て。あ。ん。の。い。と。と。病。ま。る。と。よ。め。ふ。こ。ら。ハ

龜條ハ同郷なる。弥三山。墓六と云。破落戸と云。契あり。その情。艱。膠
 り。く。持。つ。と。く。皮。ま。る。君。と。と。比。目。連。理。は。方。を。ろ。く。要。時。ゆ。り。瓜
 離。と。と。あ。ん。む。日。あ。り。存。亡。不。定。の。父。が。籠。城。母。の。劬。勞。を。幸。ふ。と。よ。め
 り。と。音。を。振。つ。て。折。は。あ。つ。た。と。よ。め。ふ。か。う。さ。る。あ。ん。む。結。城。の。城。と。よ。め
 と。今。茲。七。月。上。浣。大。塚。は。仲。の。え。い。ふ。と。よ。め。ふ。あ。ん。む。病。を。常
 る。母。親。へ。こ。も。付。麼。の。ゆ。と。歎。死。ま。り。と。よ。め。ふ。その。日。よ。り。て。頭。あ。ぐ。ぎ。湯。水。ゆ
 咽。喉。小。下。後。死。を。ま。り。外。よ。め。ふ。と。よ。め。ふ。龜。條。ハ。か。み。む。む。の。母。の。病
 著。者。と。り。か。じ。月。来。より。懸。入。と。よ。め。ふ。と。よ。め。ふ。墓。六。の。瓜。傭。人。と。よ。め
 六。と。共。の。食。い。共。小。寝。る。瓜。又。あ。つ。た。死。樂。と。よ。め。ふ。と。よ。め。ふ。瓜。ハ。外。よ。り。て。墓
 六。と。共。の。食。い。共。小。寝。る。瓜。又。あ。つ。た。死。樂。と。よ。め。ふ。と。よ。め。ふ。瓜。ハ。外。よ。り。て。墓

その月の晦ふ四十の月八のころとて率ふとてなほほと鳥の外に注
めらる所が遣送せしむ。標乃石の苦甚せしむ。移る所の不掃る所か
亀條へ情願の如く。墓六と夫婦はよろしく。一兩年を送る程ふ嘉吉二年
の比うしよ。前管領持氏朝臣の季のあん子永壽王とやせし。謙倉滅
亡のと死乳母は抱は信濃の山中に脱はる。郡の安養寺の住僧と
乳母が兄うろたひく。精悍しくとてのじ。播磨の近臣大井扶光と心
合し。年来養育者なり。と謙倉は風聞せし。官領憲忠の老臣長
尾判官昌賢とて。瓜東國の諸將と相謀り。遂に謙倉へ迎せし。八
州の連帥と仰せし。則ち服させし。左兵衛督成氏とて。あ
け。とて。結城に封せし。家臣の子孫は召出せし。あは。又彼
山墓六へ時分る。と。俄頃。大塚氏を冒し。謙倉へ上。英

濃の標井うろ。封死せし。あ兄春王安王両公達の傳る。大塚匠代が女提督
よ。次所々。恩賞承て。昌賢が。豊嶋る。大塚へ。遣。鐙の
室を。孔明せし。小匠代が女見よ。既。分明る。と。人。墓六。人。と。り。
武士。ふる。べ。死。め。の。あ。後。小。村。長。狐。命。は。帯。刀。を。許。さ。る。八。町。四。
反の莊園を宛行と彼地の陣代大石兵衛尉が下知承て勤むべ死旨を
仰。見。あ。墓。六。の。瓦。廂。は。御。門。に。造。り。建。て。奴。婢。七。八。人。召。使。ひ。莊
客。們。を。遣。讀。し。野。の。が。田。へ。の。水。を。引。ば。その。久。後。は。あ。は。も。豊。け。人。と
る。と。ふ。け。り。不。題。大。塚。番。作。一。成。の。昌。義。小。子。束。を。付。ひ。く。信。濃。の。鹿。麿。小。赴
き。と。あ。湯。治。さ。る。程。小。子。足。の。痲。ひ。と。も。咽。の。筋。や。縮。ま。る。と。是。より
行。歩。自。在。な。る。と。と。の。終。九。磨。よ。と。一。年。あ。ま。り。送。る。程。父。の
要。果。る。と。武。藏。さ。る。母。を。為。回。と。今。茲。杖。は。持。乃。と。大。塚。は。赴。入。と

甲斐の甲斐多るのこ夏に瘧疾又犯さるる秋盡るまで頭あうらむ憂甚苦乃
 中の年月さうら嘉吉も早二年ゆぞろりぬ世間陝た刃をえりてん流るは
 大塚と告げんこの憚るるあはれ能く足を駐り日よる大塚の大の
 字の一点を加つ大塚番代と名生るゆめを定めり世の経営あはれ
 東に儘は織績ぐその麻衣の麻糸より細煙をえり後らからと燃えん二年の
 流浪小賸祿既又竭果しくふけるといひ折春王安王のおん弟永壽王成
 氏朝臣長尾昌賢が討ひて鎌倉の武將と仰且戦死の家臣の子とあら
 彼此は潜居る衣呂御のあまの温泉又湯治する行客ホカ物くるま
 風声大なるさぶら番代夫婦のあはれ勢ひ今何の時候る候人縦行歩ハ不自由
 うらももどかめもさく武流へ赴死母と姉と小對面しく直は鎌倉へ推系し
 春王丸のおん像見村雨のおん佩刀を成氏朝臣に獻りて父通代かへさるん

旧男井直秀が忠死の逸事告身とて進退を君に任せ然ハテ夫婦遠く
 起行の準備しく手末甚だ蒙り由縁の里人ホ別れ告ぐ武流の大塚まで
 多むたさるさるに番作ハ隻脚蹇たる杖を力に道とて女房自東又杖持
 兼町よりとて憩ひ三四里より日をくらぶ思ひの外小日積りて八月は信
 濃坂出づ一月のともふ及まからや舊里近くる番作ハ人々を小母の
 うんむれとて郷より此へとて白屋にまよる大塚直作て人の妻と
 女児ハ恙さうやと外がまげは向へ亭主とあはれき公羽指扱るが夫婦と見たり
 原来和違ハ彼方さるの殘迹つるるあはれよ母親ハ力まらりて二年あまりこ
 年ぬもつて病著を看とりせむ女の子が不孝淫奔ハ告るも傷痛はるが
 女婿跡山暮六ハ丸彈せむるの破落戸ぐゆにが箇様との由緒を
 まらりてハ町四及の社園をのり刃をて又許さるて村長知うけの今今

大塚墓六とて、その宅地ハ並桐のあり。如此この妙ふくと町崎小海一にぞ。
 番作侯あごごち敬馬さる所、好亀條が為、替六が人とるり、又詳小同盡。
 考、外面へ退れ出、束りろ共言葉、頻涙さ、且、番
 作、杖をさめて、嘆息、弟の病著と、わびる。うてや、筑前、小、奉、承、を、
 母の終焉、あひ、さ、り、ご、加、以、父、が、忠、死、を、墓、六、と、か、ら、小、掠、々、と、大、塚、の、苗、字、を、
 穢、る、今、こ、の、より、系、所、人、は、村、雨、の、宝、刀、が、も、あ、る、と、勝、利、疑、ひ、ろ、う、と、
 栄、利、の、あ、り、あ、る、と、争、ひ、骨、肉、膚、を、聞、か、か、れ、た、に、か、か、せ、る、あ、る、か、
 倉、殿、の、献、じ、に、ご、好、不、孝、の、人、に、替、墓、六、の、不、義、は、て、富、り、張、り、
 り、の、ふ、ふ、と、わ、ぶ、ね、う、と、さ、あ、は、た、や、と、吐、け、き、東、の、涙、を、拭、
 しく、後、の、慰、ま、を、目、外、あ、く、脊、一、嗟、嘆、を、り、け、る、あ、ま、り、よ、う、と、
 処、を、故、老、の、里、人、ホ、を、喜、ぶ、と、ご、う、妻、の、人、さ、小、娘、と、る、
 と、告、志、を、告、志、し、
 山、清、堂、雜

鏡下、親の墳墓を護ん、爲、この地、又、復、ひ、せん、と、の、里、老、の、番、作、が、薄、命、を、
 あ、り、と、て、愉、く、引、つ、彼、此、人、を、召、集、合、し、件、の、ろ、め、あ、る、と、
 實、は、妙、地、を、ご、か、村、ハ、む、う、よ、ま、大、塚、氏、の、采、地、より、一、早、
 領、安、堵、の、今、小、至、り、其、子、ハ、日、蔭、の、花、と、凋、れ、
 六、は、横、領、せ、る、ご、且、ふ、り、る、不、幸、や、ある、と、
 争、ん、の、世、話、よ、い、ん、澄、文、の、お、後、は、ご、う、う、
 強、き、折、り、の、東、人、の、生、平、ご、じ、憎、し、
 か、と、當、村、中、が、引、養、い、養、う、ご、
 り、と、一、人、か、の、會、話、ひ、て、置、く、
 夫、婦、が、歎、息、け、る、ご、
 宅、地、の、前、面、よ、う、ご、
 空、房、あ、る、ご、
 山、清、堂、雜

山、清、堂、雜
 卷、二、第、二、章、第、三、節

丸へ復し。又残を出し集めく。此の田園を購求めく。番代田と唱つ。夫婦が衣
 食の料ふせつ。是の舊主の恩。八ひ番代が薄命。相憐むのふあらず。
 憎しと。暮六夫婦。物入をせん。その所。剛毅木訥。仁よ。しと
 八ひ。聖結。こころ。ふ。稱。か。番代。八里。入。好。富む
 ぬ。あ。食。苦。苗。集。今。大。復。由
 益。大。唱。里。師。親。め
 思。報。八。東。里。の。女。子。小。如。延。衣。終。貴。を。教。て。親。た。め
 恩。報。八。里。人。小。野。菜。の。初。穂。何。物。贈。る。親。た。けり
 時。嘉。吉。三。年。去。年。後。房。伏。姫。せ。れ。さ。番。代。暮。六。龜。條。の。死。せ。り。と。は。は
 今。後。の。成。成。生。ま。る。八。里。人。八。回。を。ま。り。番。代。が。瘡。入。る。と。も。妻。と。ふ。り。還。す。と。も。里。人。小。尊。信。せ。り
 ま。く。こ。家。の。向。斜。よ。ト。居。せ。り。為。侍。の。ゆ。も。と。毎。日。娘。を。限。り。は。

け。方。へ。ま。の。八。人。と。の。心。を。せ。り。小。百。歩。の。間。は
 住。一。と。を。妨。む。今。は。と。腹。を。え。り。後。有。一。日。龜。條。の。墓
 六。高。量。一。人。を。り。番。州。の。女。の。か。ひ。る。力。を。母。を
 者。と。ま。く。親。の。遠。言。黙。止。く。暮。六。の。死。招。入。と。は。は
 家。興。せ。り。の。人。の。志。は。可。る。と。和。殿。の。阿。容。と。と。戦。場。を。逃。れ。去
 融。の。如。く。ま。り。隠。れ。母。の。今。果。は。あ。り。と。命。助。と。う。幸。ふ。世
 間。廣。く。の。小。婦。女。子。を。推。乃。来。り。里。人。小。を。詐。欺。り。既。よ。その。陰。派
 家。を。恥。と。せ。と。間。近。に。住。居。派。と。言。ふ。よ。う。ふ。と。び。由。を。妨。む
 他人。を。親。と。骨。肉。を。遠。け。く。妻。礼。を。り。ふ。と。や。と。あ。れ。が。良。人。の
 大。塚。の。家。督。と。既。よ。一。郷。の。長。と。り。や。入。る。心。派。扱。と。胡。越。の。名。を
 る。と。と。圓。小。貴。賤。の。差。別。と。入。と。長。少。の。礼。讓。あり。り。と。知。り

まことしづか村は措きて他郷へ立去りてをりせける番代をのり冷笑ひ
 某定は不肖なるも父とも小菴城へ主君の命を惜まざりて戦
 りて死さば君父の先途を人爲るるをささげてを指井まて父の仇を
 報とせり。君父の首級を隠しおのりて女房を小菴城
 名告あて。仇磨の沖湯は身を保養し。僅に平愈を志しとて行歩不
 自由なり。長途は乃た去歳へ又長病ふ一年を化ふる。今茲再ひ
 おのり起して杖を携り妻小枝を稍おとす。母の終焉は城の不孝
 深奔人のよく志とす。婿夫何木の功あてて重職をうけり。大福を
 賜りて久しきがさるる所を某父の送命より。春王君のお人御刀村而
 の一腰を領し。せりてふふと然とも。且て鎌倉殿に献上し。聊争ふ
 むすのたふ。城夫婦の幸ひるる。番代定は不肖なるも不孝の婿と

ことふ忍びむと不義の婿夫を被ひ。かくも當所へ追入ると。是非の
 及ぶ所あり。鎌倉へ訴をす。公裁は仕べしと答ふる。その人立りて
 云々と告ぐ。龜條はさふもつらむ。墓六も直と呆れ。念腸を絞む
 とも。毛を吹疵を求人。とややふもいへ。このちの音もせむ。番代へ
 杖を携り。母の墓を折る。未だ。墓六と面を對する。とやあれども
 ののひる。つたつとけり。かく又十年あつた。の春秋を歴く。享徳三年十
 二月。鎌倉の成氏朝臣亡父の密敵を討つ。管領憲忠が竹下を
 殊に。是より東國再び乱れ。次の年康正元年。連滅亡の年あり。お
 成氏の軍敗れ。憲忠の弟房頭その臣長尾昌賢。ホが。小菴倉城を
 落さ。下総許我の城を籠め。合戦亦復。数年小及。つて大塚番
 地へつくと。今戦國の習ひ。臣たるもの。その君を征し。冠履所と



八代信二朝義三

山石可憐

異ふ世の世の... 薄命の歎く不足... 只後
 されぬ不孝とまゝなる女房... 東を娶てより十四五年が同... 男児三人
 まで産せしこと... 襦袢の中... 一人とて生育...
 子東へ同庚... 二十の齡... 入子を... 難...
 遺憾と云ふ... 夫の連懐... 東も... みる... 姥捨... 月
 なる... 不かく... 忽地... 瀧の川... 辨才天...
 する... 古廟... 靈驗... 祈らば... 應報...
 中て夫... 告て... 決の... 朝... 起... 件の朝... 日... 一子を... 祈... 他
 念... 今茲長祿元年の秋... 伏... 九月... 伏... 八房... 二年...
 日... 懈らむ... 時... 長祿三年... 九月... 伏... 八房... 二年...
 時... 明... 月影... 東... 小... 遠... 宿所

あ... 瀧の川... 岩屋敷... 糸... 既... 下向... 赴... け... 夜... 明
 せ... 純... と... 稲... 露... 搦... 田...
 脊... 黒く... 腹... 白... 狗の子... 棄... 人... 白... 尾... 掉...
 心... 東... 裙... 追... 又... 離... 赤... 子...
 立... 駐... 人... 暮... 人... 棄... 子... 祈... 赤... 子...
 子... 狗... 子... 産... 子... 子... 赤... 子...
 枕... 辺... 子... 置... 神... 赤... 子... 祈... 赤... 子...
 子... 子... 拾... 人... 抱... 赤... 子...
 南... 小... 鬘... 雲... 引... 地... 遠... 嬋... 娟...
 一... 個... 山... 媛... 楚... 宋... 玉... 見... 神... 女... 伎... 魏... 曹... 植... 筆... 託
 せ... 洛... 神... 類... 黒... 白... 斑... 毛... 老... 犬... 左... 小... 教... 類... 殊... 殊... 合... 合... 合... 合...

存あつひひ東あづまを招まねへり。舞まへるあくく一いつつの珠たまを投なげ與あららふらんん東あづまへ今いまああの
奇特きせきをを見みるる。ああららくくつつららわわららが遠とほくくもも瓜うりささ伸のぶぶ。俣まの珠たまを受うけんと
せせふふ珠たまのの股またを編ありりてて振ふるとと雜あららのの不ふ落おちちふふ其その首くびをを彼か首くびとと東あづまでで
空あららででもも又またああららととほほあるる。舞まへりりふふそそああのの天あまををちち仰あげげハハ靈たま雲うみ忽たち地ち延の
ろくろくくななららままてて神かみ女め由ゆ其その小こ兒こええののああららむむどどとと平ひら度た又またああららむむとと名なへへららふふここのの雜あ
狗いぬ抱いだええああげげとといいそそくく宿あ野のはは還かへりり俣まのの緯いとのの越こええ夫おとこ番ばん俣まつつげげて
いいみみかかうう特とくととのの神かみ女めのの姿すがたハハ山やま姫ひめとといいみみののめめええとと辨わ才さい天あまはは似にああららむむここのの
授あづけけののああららむむ。珠たまハハ子こ胤ひなででああららむむええのの瓜うり取とりり失あははれれるる。ハハ願ねが望わののああららぬ
祥さまああややああららむむ。ろろくく小こ兒こののああららむむ。とといいハハ番ばん俣ま沈しん吟いんドドいいままくくここののああららむむ
へへららむむ。俣まのの神かみ女めハハ黒くろ白しろ斑まだら毛けのの老おい犬いぬハハ乗のりののああららむむ。ここのの俣まハハ大おほ塚づか
るるとといいハハ大おほ塚づかとと更あらむむ。又またここのの名なハハ一い成じやう一い成じやうのの成じやうのの字なハハ則すなはちち支し干かんのの成じやうののああららむむ。

名な経けい自じ性じやうのの憑たより加か稱しょうああららむむ。今いま求もとむむここのの雜あららむむをを獲とりりてて念ねん願げん成じやう就じゆのの
祥さまああららむむ。そのその狗いぬををままじじららむむ。畜ちく三さん月げつ日じつとと論ろんささむむ。東あづまへへ有ありりと
ああららむむ。憑たより加か稱しょうああららむむ。今いま求もとむむここのの雜あららむむをを獲とりりてて念ねん願げん成じやう就じゆのの
ろくろくく身みあありりくくららむむ。寛かん正せい元げん年ねん秋あき七しち月げつ戌しゆ戌しゆのの日ひ及およぶぶ。とと平ひら度た又またああららむむ
男おとこ兒こをを産うむむ。ここのの兒こハハ是こゝろ名なめめ。ああららむむハハ大おほ士しのの一い人にんああららむむ。大おほ塚づか信のぶ乃のとと俣ま
とといいハハ是こゝろ名なめめ。ああららむむハハ大おほ士しのの一い人にんああららむむ。大おほ塚づか信のぶ乃のとと俣ま
右みぎ大おほ塚づか信のぶ乃の列れつ傳でんハハ父ちち祖そののうう瓜うり祥さまああららむむ。そのその他ほかののうう瓜うり者せう畧りやくとと是こゝろ名なめめ
下した七しち士しのの傳でんハハ至いたるる。家け譜ふをを者せう畧りやくとと是こゝろ名なめめ。只ただそのその人ひとののうう瓜うりをを祥さまああららむむとと東あづまでで
文ぶんをを綴つじじ義ぎをを演えんずず用もち心こゝろ一いふふああららむむ。音ね官くわんよよららむむ。空あららむむ。

里見八犬傳第二輯卷之三

